

第6学年東組 国語科学習指導案

学習指導者 森山 敬三

単元 「文章の構成を考えながら読もう - 『イースター島にはなぜ森林がないのか』 - 」

1 本単元のねらい

国語への関心・意欲・態度	読むこと的能力	言語についての知識・理解・技能
イースター島に森林がなくなった理由について、文章の構成を考えながら読んだり、自分の考えを友だちと交流したりしようとする。	文章の構成を考えながら、要旨やそれを支える根拠を捉えたり、キーワード、中心文、中心段落を基に要約したりすることができる。	当該学年配当漢字を読み書きしたり、教材文中のことばの意味や指示語、接続語等の役割を理解したりする。

2 単元について

(1) 教材開発について

昨今の説明文教材では、語・文 段落 まとまり 要旨(いくつかの根拠に支えられた論)という、いわばボトム・アップ型の過程を辿っていく学習が多い。しかし、文章構成を捉える読みにおいては、まず、要旨を捉えるトップ・ダウン型の読みを行う方が望ましいと考える。

トップ・ダウン型の読みには、要旨を自分自身で探し出すという、一種の謎解きの面白さがある。それに対して、ボトム・アップ型の形式的な読み取り指導は、作業が単調になりがちである。しかも、教材文をかなり読み込んだ段階で要旨を捉えるので、答えは既に見えている状態であり、前者ほどの知的好奇心は生じない。

また、全体と部分の関係が把握しやすくなる。野口悠紀雄氏が言うように「全体を把握していると、個々の部分がどのように関連しているかがわかる。」のである。最近の心理学研究においても、トップ・ダウン処理が読解力の形成途上にある児童期に重要であると指摘している。

加えて、読みの初期の段階で要旨を捉えているので、要旨を支える根拠(幹)と、付加された部分(枝)が区別しやすくなる。一方、ボトム・アップ型では、文章の全体像が見えていないので、部分部分を要約する際に、そのような区別ができにくい。

(2) 教材の組織について

構成を考える段階で、言葉や接続語等の意味内容についての理解が不十分であると、そちらの方向へも思考のエネルギーが流れてしまうことになる。構成を考える際には、構成だけに思考のエネルギーを集中させることが望ましい。そこで、構成を読むことに先立ち、文章全体の通読を通して言葉の意味や指示語、接続語の役割等について理解させる。これは、子どもの経験と教材文を結び付ける役割も果たす。

次に、文章構成に関する先行知識(例えば、「要旨は文章の始めか終わりの方に書かれていることが多い」「なかには要旨を支える根拠が書かれている」など)によって、トップ・ダウン型の読みを行い、文章全体の要旨を把握させる。文章全体を俯瞰させるのである。

この後、子どもは要旨を基に、重要な部分とそうでない部分を区別しながら、読んでいくことになる。ここでは、中心文・中心段落の見付け方、要約の仕方に関する思考様式を同一教材文中で繰り返し転移・活用していくことになるが、形式的な繰り返し指導ではない。あくまでも要旨に必要な根拠かどうかを吟味するためという、目的意識をもった要約である。

いわば、トップ・ダウン型とボトム・アップ型の相互作用による読みが展開されるのである。

3 単元計画（総時数 7時間）

内容の大体を捉える（2時間）

通読し、言葉の意味や指示語、接続語等の役割を理解する。
「イースター島にはなぜ森林がないのか」の要旨を捉える。
【本時 2 / 2】

始めの方に問いがあるときは、その答えになっているところが要旨だ。

③「イースター島の森林は、なぜ、どのようにして失われてしまったのだろうか。」が問いだ。題も問いの役割をしているぞ。

「なか」に書かれている根拠から要旨を探せばいいよ。「なか」には、「人が森林を切りひらいたこと」や「ラットがヤシの実を食べてしまったこと」が書いている。だから、要旨は②だ。

文章の要旨を捉えることができる。

単元編成の工夫

言葉の意味や指示語、接続語の役割等、言葉とそれが指し示す意味について思考を集中させるとともに、子どもの経験と教材文を結び付ける。

文章の要旨を把握させることで、文章全体を俯瞰させる。（トップダウン型）

既習の思考様式を用いて、要旨を捉えさせることで、その習熟をねらう。

「要旨に必要な根拠は書かれているか」という目的意識をもたせ、まとめごとに要約させていく。（トップダウン型とボトムアップ型の相互作用）

既習の思考様式を用いて、中心文・段落を指摘させたり、要約させたりすることで、その習熟をねらう。

文章の構成を捉える（4時間）

イースター島に森林がなくなった経緯を読み取る。

要旨から考えると、「ヤシ類の森林が、人間による直接の森林破壊でほぼ完ぺきに破かいされたこと」、「ヤシ類の森林が、ラットがもたらした生態系への影響によって、ほぼ完ぺきに破かいされたこと」、「ポリネシア人たちの上陸後、わずか千二百年ほどでほぼ完ぺきに破かいされたこと」が書かれているはずだ。

は⑧~⑱、は⑲~⑳だ。は時を表す言葉を書き出してみよう。

①~②は、イースター島の紹介だ。話題提示の役割だな。

②②~②⑦は何について書いているのかな。2つのまとめりに分かれそうだ。

要旨を支える根拠やそうでない部分を、まとめごとに要約することができる。

文章全体の構成を捉える。

「序論」 ①~③、「本論」 ④~⑳、「結論」 ②①~②⑦だ。

文章全体の構成を捉えることができる。

発展的な学習（1時間）

文章の構成を評価する

「結論」部分の長さについて吟味する。

要旨に必要な根拠は、きちんと書かれていたよ。でも、今まで学んだ説明文と比べると「結論」が長いなあ。どうしてだろう。

「結論」を長く書いた筆者の意図を探ることができる。

「結論」部分の長さの是非を、文章構成の全体のバランスや筆者の意図等から検討する発展的な学習を位置付ける。

4 本時（2日目）の学習指導 【研究授業】

(1) 目標

これまでに学んだ要旨の捉え方に関する思考様式を生かして、「イースター島にはなぜ森林がないのか」の要旨をつかむことができる。

(2) 学習指導過程

学 習 活 動	子 ども の 意 識
1 学習のめあてを確かめる。	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">「イースター島にはなぜ森林がないのか」の要旨を見付けよう</div>
2 考えを交流する。	<div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>「21このようにして、…破かいされてしまった。」だ。イースター島に森林がなくなった理由や「このように」という言葉がある。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>「25ひとたび自然の…厳しい運命をたどる」だ。生態系を傷つけ、文化も人々の心もあれ果ててしまった証拠が書かれている。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>「27今後の人類の存続は、…ないだろうか。」だ。子孫に思いをめぐらさなかったから、森林がなくなってしまうと思う。</p> </div> </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <p>根拠はどこ？ → 20~23に書いているよ。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>20~23は、人類や子孫のことではなくて、イースター島の人々のことについて書いているから、25は要旨じゃない。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>25は筆者が後から考えたことで、27は筆者の感想だ。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>3の「問い」に対する「答え」になっているのは、21だ。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>要旨は見付けられたね。ところで、この文章は、要旨に必要な根拠がきちんと書かれているのだろうか。</p> </div>
3 次時への課題を作る。	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>要旨の文が長いなあ。整理してみよう。 ヤシ類の森林が、人間による直接の森林破壊でほぼ完ぺきに破かいされてしまった。 ヤシ類の森林が、ラットがもたらした生態系への影響によって、ほぼ完ぺきに破かいされてしまった。 ポリネシア人たちの上陸後、わずか千二百年ほどでほぼ完ぺきに破かいされてしまった。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>本文中には、3つの根拠がきちんと書かれているのだろうか。</p> </div>

< 前時までの子どもの学びの様相 >

5年生の時には、「文章の始めか終わりの方を探す」「『なか』に書かれている事柄から探す」「『問い』があれば、『答え』の部分を探す」という要旨の捉え方に関する思考様式を学んできた。結論部分が長い説明文だと、約半数の子どもが筆者の感想、願いを書いた部分を要旨だと指摘してしまう。

教材開発と子どもの反応の組織化及び評価

【教材開発】 要旨の捉え方に関するトップ・ダウン型読みの導入

トップ・ダウン型で要旨を捉える読みには、答えを自分自身で探し出すという、一種の謎解きの面白さがある。子どもたちは、これまで学んできた要旨の捉え方に関する思考様式を用い、トップ・ダウン型の読みで要旨を同定しようとするが、本教材文の特性から見ると、大きくは以下の3つの反応に分かれることが予想される。

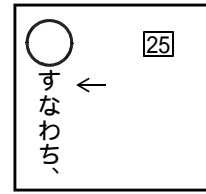
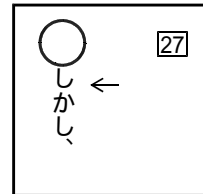
21) このようにして、三万年の間自然に保たれてきたヤシ類の森林が、ばっさいという人間による直接の森林破かいと、人間が持ちこんだ外来動物であるラットがもたらした生態系へのえいきょうによって、ポリネシア人たちの上陸後、わずか千二百年ほどで、ほぼ完ぺきに破かいされてしまった。

25) ひとたび自然の利用方法を誤り、健全な生態系を傷つけてしまえば、同時に文化も人々の心もあれ果ててしまい、人々は悲さんで厳しい運命をたどる。

27) 今後の人類の存続は、むしろ、子孫に深く思いをめぐらす文化を早急に築けるかどうかにかかっている。

【反応の組織化】 文相互の関係から3つの意見に集約する（異同関係の明確化）

上記の3つの意見の異同を子どもが明確に把握できるようにするために、同じ意見、根拠を連続して発表させる。また、25と27はそれぞれ2文で構成されているので、「2文とも要旨である」「2文のうち1文が要旨である」という意見に分裂する可能性がある。そこで、前学年までに学んだ接続詞による文相互の関係に着目させ、分裂した意見をそれぞれ 文目を要旨とする意見に集約していきたい。



【反応の組織化】 要旨の捉え方に関する思考様式を用いて吟味させる（整合性の吟味）

「根拠はどこに書かれているか？」という反論を軸に反応を焦点化していく。

< 「21である」に対して > 上記のような反論がなされても、3～20から容易に根拠を示し得るであろう。

< 「25である」に対して > 上記のような反論がなされた場合、子どもたちは、22～23をその根拠として挙げてくることが予想される。本文は、あくまでもイースター島の森林破壊について書いており、25はそれを自然や人々一般にまで当てはめている。子ども達はこの論の飛躍に気付かず、納得するのではないか。「根拠のある場所が後ろすぎる」という意見に対しても、「根拠があるのだからかまわない」と食い下がるであろう。

< 「27である」に対して > 根拠は書かれていない。子ども達は意見を変更するであろう。

【反応の組織化】 根拠と要旨のつながりを吟味させる（整合性の吟味）

21と25とに絞られた段階で、改めてそれらと根拠の関係を吟味させたい。21も25も一文が長く、語句も少し難解である。そこで、要約の基本である主語（既習）に目を向けさせる。

21) … (イースター島の) ヤシ類の森林は、ほぼ完ぺきに破かいされてしまった

【根拠】 3～20…イースター島の森林破壊について書いている

25) … (地球上の) 文化も人々の心もあれ果ててしまう。(地球上の) 人々は悲さんで厳しい運命をたどる

【根拠】 22～23…イースター島の自然や人々のことを書いている

つまり、25を要旨とするならば、地球上の様々な人々を例にしなければならないのである。

【評価】 方法：ノート

B：本文中の根拠を1つ示し、要旨である文を指摘している。

A：本文中の根拠を複数示したり、「問い」と「答え」の関係や「このように」等の言葉に着目したりして、要旨である文を指摘している。

< 判断基準 B 例 >

要旨は21だ。理由は、8～10に森林が切りひらかれたことが書いている。だから、要旨は21だ。

< 判断基準 A 例 >

要旨は21だ。理由は、8～10に森林が切りひらかれたことが書いている。また、3の「問い」の答えになっている。だから、要旨は21だ。